

Title	Lycidas ひとつの解釈
Author(s)	藤井, 治彦
Citation	Osaka Literary Review. 1 p22-p.32
Issue Date	1962-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25837
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Lycidas —— ひとつの解釈

藤 井 治 彦

Lycidas についてはすでに多くの事が言われている。ことに Tillyard 以後、Ransom, Brooks と Hardy, Allen, Tuve, Fraser と続く一連の研究と批評を読む時、この詩について何らかの全く新しい事実を提出することはほとんど困難であるように思われる。今、我々のなすべきことは、今日までの研究の成果を出来るだけ理解した上で、この詩のどのような所が今日の我々とかかわりを持つか、あるいは、どのような点がこの詩を我々から遠いものとしているかを述べることであろう。

Lycidas の中に、我々の直接的な感動をこぼむ要素があることは確かに認めなければならない。まず何よりも我々を戸まどわせるのは、それが牧歌であることである。言うまでもなく、*Lycidas* は構成の上においてもいくつかの牧歌の慣習を守り、又、表現や用語においてもそれ以前の牧歌をふまえたものを多く用いている。そういう事実は、牧歌という形式が生きて働いていた時代には、その形式特有の魅力をこの詩にあたえたものと思われるけれども、牧歌という形式の約束が忘れられた今日では、かえって、読者をこの詩から遠ざける原因となっている。

さらに *Lycidas* を書くに際して、Milton にひとつの規範を提供した Theocritus や Virgil の牧歌はその内容においてもある限界を持っていた。それは、これらの詩が逃避的な精神をひとつの基調としている、ということである。牧歌は、必ずどこかに現実から逃避したいという気持をあらわしている。Theocritus はその idyls とよばれている詩のいくつかの中で、現実の混乱をのがれようとする心の動きを牧羊者の生活という像に

結びつけることに成功し、Virgil はその牧羊者の生活を、薄明の中に描くことをひとつの手段として、牧歌の世界を完成した。Virgil の牧歌集が「枝を上げたブナの木蔭」に横たわるティータルスの姿に始まり、「蔭は詩人には害がある」と木蔭を去る詩人の姿に終って、いわば、その牧歌世界が、影の薄明の中に置かれていることは、注目すべきことである。³

Milton の初期の詩, *Nativity Ode*, *L'Allegro*, *Il Penseroso*, *Comus* 等はこの古典牧歌と共通する精神と表現をひとつの要素として持っている。これらの詩にくりかえしあらわれるのは、現実の世界には、秩序と調和が欠けているという意識と、どこかに理想の国があるという信念と、その国へのあこがれの感情である。これは必ずしも逃避的とは言えないかも知れないが、逃避的態度と共通するものであるとはいえよう。又、Brooks が *L'Allegro* と *Il Penseroso* に見出した“cool half-lights”⁴ は、やがてこれらの詩のすべてに多少とも見出される重要な一要素であり、おそらく Milton が Virgil からうけついで貴重な遺産であったと考えられるものである。

これらの要素は *Lycidas* にも見出される。For we were nursed upon the self-same hill” (l. 23) とはじまる回想の部分、乙女達と木影でたむれようかという部分 (ll. 67-9)、そして、“Return, Alpheus, the dread voice is past / That shrunk thy streams” (ll. 132-3) に始まる花の一節の中に、おだやかな光の中の牧人の国へのあこがれをみる事が出来る。

逃避は自由を与えられている人間の根元的な態度のひとつである。我々は、変化の中で刻々に決意する重荷を放棄して、「自由からの逃走」をおこないたいという願いを持っている。そして我々は時の停止した、変化のない、激しい光の射さぬ国を絶えずあこがれている。それ故に、牧歌の精神はどの時代の人間にも共通するものを持っているといえるのである。⁵

しかし、逃避の精神は限界をもっている。ひとつの文学作品は、それが

もし偉大なものであるならば、人間の生の全体を示すものであり、肯定を通じてにせよ、否定を通じてにせよ、現実の人間の存在状態を明確に示すことを通して、人間のこの世に耐える気持につながってゆくものでなければならぬ。

もし *Lycidas* が、単に牧歌の枠内にとどまるものであったならば、以上のような、そのジャンル特有の形式と内容両面の制約によって、我々との間のへだたりは今以上に遠いものになっていたに相違ない。しかしながらこの詩は、一面において牧歌の伝統をうけついでいると共に、他面、古典牧歌をはるかに越える要素を持っている。それは、人間の死と、その死の意識を契機にすることによってのみ可能となる、人間の存在の認識が、この詩に示されているということである。

もとより *pastoral elegy* という形式は昔からあったわけであって、古典牧歌にも人間の死はとり扱われている。Theocritus では第一牧歌、Virgil では第五牧歌がその例であり、又 Bion には “The Lament for Adonis” が、Moschus には “The Lament for Bion” がある。しかし、そこでは、死が甘美なかなしさをもって歌われることはあっても、破壊的な虚無としてとらえられることはなく、又、人間を死に至る者としてとらえる見方も、全然ないわけではないにしても、稀であった。

Lycidas における死は、このような古典牧歌における死とは全く異っている。ここで Edward King の死はひとつの体験の契機を提出している。King は Milton にとっては結局他人であるに過ぎないであろう。しかし、死は誰にとってもまぬがれがたいものであり、他人の死は自分の死の可能性をありありと示すことがある、ということこそ重大である。多くの人はこの素朴な、しかし、根元的な恐怖の体験を日常の営みの中にすりかえて、忘れ去ってゆくことによって解決してゆく。Milton はこの恐怖の体験に執着し、それが自分に対して意味するものを感じつくし、そして、そこからの脱出をこころみたのである。もしこの詩において誠実さというこ

とを問題にするならば、友人の死をどれだけ悲しんでいるかということが問題なのではなくて、他人の死において自己の死をみる誠実さを問題にするべきであろう。 *Lycidas* は、死が間違いなく我々を待っていることを始めて感じた青年の体験と、その問題の克服を書いたものであるというのが、この作品の主題についての最も正確な言い方であると言えよう。

そのような体験のひとつの重要な局面は、自分が尊重し、そこに価値を見出していたものに対するうたがいが生じることである。 *Lycidas* には、一方に死の提出する、価値に関するうたがいがあり、その解決がせまられている。しかしそれは、できるだけ回答をのばして、そこから逃れたい問題でもある。逃れる場所として、おだやかな牧歌の世界が一方に用意されている。しかし、どこまでのがれても、死の影は心に射し、牧歌的な平和がいつものものにすぎぬことが念頭を去らない。この交錯がこの作品の基本的な型となっている。これは交錯というよりはむしろ、疑いと回答を段階とする心理の展開というべきかも知れない。

疑いはまず芸術——この場合は詩——の価値にむけられる。自分が、いわば日常的な幸福をすてて、芸術に身をささげ、禁欲的な精進をつづけているのに、かがやかしい名声を得る前に死が訪れるかもしれない。自分が価値をおいたこの生活態度は無意味なものではないだろうか、という疑いがおこる。しかし、この疑いは地上の名声という目的を相対的なものと考えることによって一応の解決を得る (ll. 64-84)。次には地上における宗教者のあり方への疑いが出されるが、それも又、地上の尺度をこえたもので審判が下るという信念によって一応打切られている (ll. 108-131)。そして、ほとんど、すべての疑問が解決されたかのように、そして、青年の死は、単に、いささかの甘美さをまじえた悲しみのみとして解決できるかのように、花の一節がつづいてゆくのである。

しかし、それはついに “false surmise” 「仮のすさび」 (l. 153) にすぎず、もう一度、芸術的生活でもなく宗教的生活でもなく、この世における

人間の姿そのものが確認されねばならない。それが、轟く海に漂う骨をえがいた一節である。

Ay me! whilst thee the shores and sounding seas
 Wash far away, where'er thy bones are hurled;
 Whether beyond the stormy Hebrides,
 Where thou perhaps under the whelming tide
 Visit'st the bottom of the monstrous world;
 Or whether thou, to our moist vows denied,
 Sleep'st by the fable of Bellerus old,
 Where the great Vision of the guarded mount
 Looks toward Namancos, and Bayona's hold.
 Look homeward, Angel, now, and melt with ruth:
 And, O ye dolphins, waft the hapless youth.

(ll. 154-64)

これは海に死んだ人間の姿であると共に、死が地上における人間の最後の姿であるという意味で人間のこの世におけるあり方のひとつの認識である。

人間が、このような姿をとる事はこの詩の最初から意識されていた。

He must not float upon his watery bier
 Unwept, and welter to the parching wind,
 Without the meed of some melodious tear.

(ll. 12-14)

という所にはすでに轟く海に浮ぶ骨が予想されている。“parching wind”は肉体を骨にまで還元するものとするべきであろう。いかに疑問に一応の解答が与えられ、牧歌的ななぐさめが用意されても、その間に肉体は骨にまでかえっていったのである。

そしてこの一節においては、もはや自然は和解的ではない。牧歌におい

ては人間は自然の一要素であり、自然と和解し、その調和の中にあつた。しかし、ここでは自然は人間と対立し、人間を呑みつくすものとなっている。“sounding seas” “stormy Hebrides” “whelming tide” に示される荒れる海は、骨をもてあそび、ほうり投げ、しかもその底には自然の秩序には入らぬような怪物の世界を秘めている。又、山には、一国を守る程の力をそなえた、超自然的な天使の幻があらわれる。このような自然は人間を無視するものであり、人間を畏怖させるものである。

しかも、又、ここで人間は空間の巨大なひろがりのただ中にある。海岸と海が死者を「遙かに洗う」“wash far away” という時、それは決して漠然とされているのではない。海は、北は、Hebrides 諸島のかなたに拡がり、南は Cornwall の Land's End を過ぎてはるかにスペインの沖に拡がっている。この遠い海原の拡がりは、我々の周囲にひろがってゆく無限の空間を暗示する。

さらに、ここには、時間の流れに対する意識がおり込まれている。Bellerus は Aeneas の曾孫の Brutus と共に英国に來たという Corineus の仲間だとされており、その名は Land's End のローマ名に由来するものである。一方、天使 Michael がスペインのとりでを見つめているというのは、スペインの無敵艦隊の再来と、ローマ法皇の力の侵入を防ぐという意味をもっていた。するとここには、建国の昔の伝説から、ローマ時代をへて、この詩のかかれた当時の人々にとってはきわめて時局的であつた事迄がふくまれていることになる。これはイギリスという国家の歴史の歩みに対する意識であると言ってよい。その意識は、ある場合には、人間に自分の位置を与え、その存在の意義を感じさせるものであるかもしれない。しかし、同時にその意識は、個人の生活や生涯を測る時間とは、殆んど尺度がことなっているかのように見える、他の一つの巨大な時間の流れを示している。その巨大な時間の前にひとりの人生はその長さを失い、卑小な点に過ぎぬものとなる。

このような、自然の力と、空間の拡がり、時間の流れを意識する時、その中にあって、死によってその存在を終る人間は、遂に波に漂い、もてあそばされる、骨に過ぎない。それは、この世界における人間のあり方のきわめて正確な認識である。Bush がここには神のない国における人間の卑小さが示されている⁷という意味のことを言っているのも、今のべた意味において、この一節に人間のこの世界における卑小さと無力さが示されていることをのべたものと理解するべきであろう。

この認識は、今日の我々の人間観の一面に近い。今日我々は、我々自身の姿をその卑小さ、無力さにおいて認めようというひとつの傾向を持っている。そして又、我々は、自分達がどこにいったのかわからない、という喪失感を感じている。この意味においても死者の骨が行方も知らず、無意味に、ただひとり漂っているという考えは、特に今日において正確な、ひとつの人間のあり方を示しているのである。

この眩惑させるような、空間と時間のひろがり、その中で自分は今どこにいるのかわからぬという喪失感を感じる時、我々は、自分達自身へのあわれみを願わずにはいられない。それは、死者のための願いである、

Look homeward, Angel, now, and melt with ruth:

And, O ye dolphins, waft the hapless youth.

(ll. 163-4)

という二行に平行するものである。天使にあわれみをもってふるさとの方を望むことを願い、イルカに死者をやすらかに運ぶことを願うというこの二行に、我々は我々自身の故郷の喪失とその回復への願いをかさねることができるのである。

しかし、次の節に進むと我々は、最後の価値の転換がおこなわれたことを知る。今迄見てきた、死者の漂泊をえがいた一節と、次の、

Weep no more, woeful shepherds, weep no more,

(l. 165)

に始まる一節の間には、ひとつの断絶がある。そして、この節では、死者は神の秩序の中に入り、あらゆる問題は解決されてゆく。この最終的な価値の転換は、アポロとペテロによってあたえられた以前の二度の価値の転換のように外からの回答によっておこなわれてはいない。むしろそれは、外面的には、ひとつの断絶、あるいは飛躍である。その飛躍は外部からの指示によらず、自己自身に対する正確な認識と理解によってもたらされたものである。⁸ 死者の漂泊をえがくことにおいて、あらゆるいつわりのなぐさめのかなたにある、真実のあり方が示された。そして人間は、真実をはっきりと知ることによって、より高い秩序へと動かされる事があるのである。

その秩序は Milton においては、キリスト教の信仰の保証する秩序であり、それは太陽が水に沈んでもふたたびのぼることにたとえられる死者のよみがえりと、天上の聖徒達の音楽によってあらわされている秩序である。

我々は、しかしながら、この一節から、その秩序を直接十分に感じとることができるであろうか。少くとも私には、前の一節で人間の卑小さや無力さが感じられたほどにここで秩序と平安を感じることはむづかしいように思われるのである。

その理由は、第一には我々の中では宗教的な表現がその力を十分に発揮できないことがあげられる。この詩が Tillyard の言うように、ある意味で、「自分の命を救おうとするものは、それを失い、それを失うものは、保つのである」(ルカによる福音書、第17章第33節) という逆説と同じことを言っていることは一応理解できるかもしれぬ。何となれば、逆説そのものはキリスト教に限らぬ普遍的なものでありうるからである。しかしその保たれた命のよろこびを直接にこのキリスト教的な像の中に感じることは、むづかしいことのように思われる。しかし、これは我々ばかりではなく現代の人間一般の問題でもあるかもしれない。

しかしながら、たとえ一瞬の間にせよ、自己の混乱をのがれ、かすかな調和を感じることは誰の体験にもあることであろう。その時の一瞬の静寂を知る者にとって、第186行からの8行は常に親しいものである。

Thus sang the the uncouth swain to th' oaks and rills,
 While the still morn went out with sandals grey:
 He touched the tender stops of various quills,
 With eager thought warbling his Doric lay:
 And now the sun had stretched out all the hills,
 And now was dropt into the western bay;
 At last he rose, and twitched his mantle blue:
 To-morrow to fresh woods, and pastures new.

(ll. 186-193)

ここにはひとつの問題を解決した者のもつ静けさがある。もし牧歌的ということを考えるならば、この八行は、それだけ切りはなしてみれば、まぎれもない牧歌である。しかしそれは、詩全体からみれば、牧歌の範囲をはるかに超えた精神の動きをもつつむ、高い次元における調和の世界なのである。ことに、最後の二行において、“twitched his mantle blue”という所、上衣を無雑作にはらうという所に、肯定的に何かを決意した後の人間の行為の明かるい軽やかさがあらわれている。そして、森と牧場の意味する多くのもののひとつには、ひとつの秩序に——現に見てはいないけれども、その存在を信じ、明日にもそこに達するかのごとく行動することによって今日の平安を我々に与える秩序に——参加することを決意した者の目うつる調和的な世界の姿があると言ってよい。それはただちに秩序に入ることを望むのではなく、その秩序の存在を信じて、未来に——“To-morrow”——ひらかれる自分の場——“woods and pastures”——を受入れること、いかえれば、この世にあることに耐える勇気を持つことに他ならない。この詩の結末が *Paradise Lost* の結末と似ていることは決し

て偶然ではない。

The world was all before them, where to choose
 Their place of rest, and Providence their guide:
 They, hand in hand, with wandering steps and slow,
 Through Eden took their solitary way.

(XII, 646-649)

もとよりここには *Lycidas* の終りにみられた一種の軽快さはない。しかし、この二つの詩の終りには、いずれの詩においても、真にある姿を知ることによって、自己のあるべき姿を知り、眼前に開ける世界に身を置くことを耐える決意をした人間、いわば、在ることに耐える勇気を持った人間がたたずんでいるのである。

註

1. E. M. W. Tillyard, *Milton*, 1930. pp. 80-85 で *Lycidas* に言及。 *Poetry Direct and Oblique*, 1934 (revised and reset 1945), pp. 81-84 で *Lycidas* に言及。
 J. C. Ransom, "A Poem Nearly Anonymous," (1933), *Milton Criticism*, ed. J. Thorpe, 1951, pp. 225-238.
 C. Brooks & J. E. Hardy, "Lycidas," *Poems of Mr. John Milton*, 1951, pp. 169-186.
 D. C. Allen, "The Translation of the Myth: The Epicedia and 'Lycidas'," *The Harmonious Vision*, 1954, pp. 41-70.
 R. Tuve, "Theme, Pattern, and Imagery in *Lycidas*," *Images and Themes in Five Poems by Milton*, 1957, pp. 73-111.
 G. S. Fraser, "Approaches to 'Lycidas'," *The Living Milton*, ed. Frank Kermode, 1960, pp. 32-54.
2. cf. "They (i. e. pastoral and romance) are escape-literature, they are wish-fulfilment." Gilbert Highet, *The Classical Tradition*, p. 165.
3. Virgil の牧歌における「薄明」について私は "Pastoral Elements in Milton's Poetry" という論文の中でくわしく論じておいた。
4. C. Brooks and J. E. Hardy, *op. cit.*, p. 139.
5. この言葉は Erich Fromm のものである。
6. cf. E. M. W. Tillyard, *Milton* (Supplement to *British Book News*: No. 26), p. 13.
7. D. Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century 1600-1660*, p. 367.

8. この断絶は形式的には牧歌の慣習である (M. Y. Hughes (ed.), *Paradise Regained, the Minor Poems and Samson Agonistes*, p. 295 の註を見よ.) が、しかし、それ以上に内面的な意味を考えるべきであろう。
9. E. M. W. Tillyard, *Poetry Direct and Oblique*, p. 84.

付記. この小論は日本英文学会第33回大会で行った研究発表に加筆したものである。なお文中の引用は World's Classics 版のミルトン詩集によった。